合格記念に、撮っておこうよ

瀬井隆

……じゃ、改めて、大学合格おめでとう、愛子。よく頑張ったね。

「あ、ありがとうございます。あの……」

ん？　どうした？

「祝ってもらえるのは嬉しいんですけど、どうしてラブホテルでなんか……しかも、飲み物とか持ち込んで」

あれ？　愛子はいつから僕のすることに口答えできるようになったのかな？

抱かれるたびに“あなたに捨てられたら死んじゃう”ってかわいく啼いてるくせに、ねぇ？

「……言わないで……恥ずかしい……」
まぁ、そんなことはいいじゃないか。はい、シャンパン。もっと飲みなさい。

「あ、そんなに注いで……ん……はぁ……」

そうそう。頬っぺたが赤くなってきたよ。かわいいね、愛子。
これからやることも、ちょっと酔ってたほうが恥ずかしくなくて済むからね。

「これからやること？」

そう。せっかく合格のお祝いしてるんだからさ。記念に撮影しようよ。
愛子ちゃんの、女子〇生最後の姿を、ね。
「どういう意味ですか……？」
ほら、そんなに怖がらないで。もっとも、その怯えた顔もかわいいけどね。
さ、シャンパンを飲んでしまいなさい。
それとも、いつも僕の唾を飲むときみたいに、鼻をつまんで強引に口を開けさせられるほうがいいのかな？

「あっ、いや……飲みます。飲みますから……うぐぐっ」

そうそう。その顔。目がとろんとして、すごく色っぽいよ。

これでもう、どんな恥ずかしいことでもできるよね？

◆

ああ、着替え終わった？

ふーん、やっぱりかわいいね、愛子の制服姿。

これで見納めってのはもったいないなぁ。今日は記念にいっぱい残しとこうね。ムービーで。

「やっぱり……撮るんですね……」

そうだよ。じゃあ、そこに立って。スカートをめくりあげなさい。

「え……？　あの……めくるところを、撮るんですか……？」

当たり前じゃない。制服でエッチなことできるのって、これからもうないんだよ？

「……分かりました。こう……ですか……？」

もっとゆっくり。
端っこをつまんで、恥ずかしそうにじわじわ持ち上げるんだよ。分かってないなぁ。

「はい……ごめんなさい」

そうそう。持ち上げながらカメラを見て、こんなふうに言ってごらん。……って。

「そ、そんなこと言えません！　恥ずかしい……」

嫌ならいんだよ？　僕たちの関係も、これで終わりにするから。

「ああっ、それはいや……いじわる……」

じゃあ、どうするの？

「うう……言います……。『こ、○校を卒業する愛子のエッチな姿、見てください』」

そうそう。いい子だね。

そうだよ。少しずつスカートを持ち上げて……。

ああ、女子〇生らしいショーツだなぁ。
じゃあ、そうやって見せたまま、……って言おうか。

「は。はい。　『愛子はいまから、カメラの前でいっぱい恥ずかしいことをします。どうぞ楽しんでください』」

はい、よくできました。
じゃあ、恥ずかしいことしようね。

◆

まずは片手で制服のスカート持ち上げたまま、ショーツを〇れ目に

食い込ませて。

「それ……凄く……恥ずかしいです……」

ふーん、やらないの？

「あっ、やります、やります。いまやりますから……」

そうそう。もっと、きゅっと絞って。そうだよ、紐みたいにね。

ほら、愛子の恥ずかしいヘアが見えた。いっぱい生えてるねぇ。ちゃんと手入れしてる？

「いやぁ……見ないで……」

もっと、ぐいっと食い込ませなさい。そう……。

ああ、いやらしいね。ぱっくり割れた谷間に下着が食い込んで、左右のビラビラに埋もれてるよ。

「ああ……恥ずかしい……」

今度は、そうやって絞って食い込ませたまま、上にきゅっ、きゅっって絞り上げなさい。

「いやぁ、それって、まるで……」

一人エッチしてるみたい？　そうだね、そう見えるね。しかも、立ってスカートをめくったまま。

僕はそれが見たいんだよ、愛子。君が恥ずかしそうに、そんな淫らなことをする姿がね。

「どうして……こんなことさせるんですか……？」

言ったじゃないか。今日は卒業記念の撮影会なんだよ。女子〇生時代の愛子を、全部動画に収めないとね。

ほら、早く。

「うっ、うぐっ、うううう」

そうそう。すごくいやらしい感じが出てるよ。
きれいに撮れてる。これはいい記念になるね。

◆

「誰にも……見せませんよね……？」

さぁ、分からないよ？

もしかしたらＤＶＤに落とし込んで、愛子が春から通う大学の学長宛に郵送するかもね。

『新入生の中に、こんな変態行為をしている女子学生がいます』って。

「やだやだ、やめてぇ」

大丈夫だよ。この映像の中で学長さんに謝っておけばいいじゃない。

……って。

「ああ……そんなこと……言えない……」

言わなかったら、入学してすぐ退学になっちゃうかもよ？　ご両親

は悲しむだろうねぇ。

「それは、いやぁ」

じゃあ、言わないと。カメラに向かって、ほら。

「ああ……が、学長さん、これを見てたら、どうか私を退学にしないでください。

か、替わりに、私のこと、学長室で犯しても構いませんから、お願いします……」

うーん、いまいちだなぁ。もっと心を込めないと。

そうだ。ぐいぐいって食い込ませながら、いやらしく腰を振ってごらん。そうしながら言いなさい。

「こ、こんなふうですか……？」

そうそう。それで、台詞は……だよ。

「は、はい。

学長さん、退学にならないためだったら、愛子はどんなことでもします。

好きにしてください。弄んでください。学長さんの机の下で、一日中おチ××しゃぶっててもいいです……」

よし、よく言えたね。
すごくエッチだよ、愛子。
目がとろんってなってきた。

さて、これからどうしようかな。
今度は大学の先輩男子に向けて、愛子のお願いを語ってもらおうかな……。

◆

さて、せっかく記念撮影してるんだから、もうちょっと過激なのを撮ろうかな。

その制服も見納めだしね。

じゃ、愛子。ベッドの上に乗って。
四つんばいになって、お尻をこっちに向けてごらん。

「こ……こうですか……？」

そうそう。
いいね、短いスカートからちらっとショーツが見えてるの。ぐっとくるよ。
そのままカメラに向かって、くいくいってお尻を振ってごらん。

「え……やだ……恥ずかしいです……」

恥ずかしくてもちゃんとやろうね。それとも、やらない？

「あっ、やります……やりますから……ううっ……」

そうそう。いいよ。

いやらしいねぇ、愛子。

女子〇生の制服姿で、ベッド上で四つんばいでお尻振ってるなんて。

ご両親が見たら泣くよ？

「だって……うう……やれって言ったから……」

あれ？　僕のせいにするの？
てっきり僕を悦ばせるために、愛子　が自主的にやってると思ったんだけどなぁ。

「うううう……」

どうなの？

「うう……そ、そうです……喜んでもらいたくて、私が勝手にやってるんです……」

そうだよね。

じゃあ、チラ見せもいいけど、スカートめくりあげてくれると、もっと嬉しいなぁ。

「そんな……」

嫌なの？

「や、やります。やります。……これでいいですか？」

いいですか、だって？

「あ、いえ、違います。これでいかがでしょうか……？」

そうそう。これはあくまで君が自主的にやってることを忘れないようにね。

うん、なかなかいいよ。

ついこの間まで本物の女子〇生だった子が、そうやってショーツ丸見えでお尻振ってる姿は。

もっとくいっ、くいっって大きく振ってごらん。

「いやぁ……恥ずかしいよぉ……」

愛子　のお尻はかわいいねぇ、ぷりんとしてて。
そのぷりぷりしたお尻をいやらしく揺らして見せ付けるなんて、愛子は本当にエッチなんだね。

「うう……」

そうだよね？

「うう……はい、そうです……愛子　はエッチで、いやらしい女の子です……」

◆

じゃあ、もっといやらしい格好を見せてもらおうかな。

「え？」

いま四つんばいになって、こっちにお尻を向けて、スカートをめくってショーツを丸見せしてるよね？

そのままショーツも少し下げて、ナマのお尻を見せてみようか。

「ええっ？　そんな……そんなことできません、絶対」

ふーん、絶対できないんだ？

「うう……やります……やりますけど……」

全部ずらさなくていいよ。お尻の割れ目が半分見えるくらいね。

「ああ……」

そうそう。いいね、半脱ぎの、その感じ。
なんだか犯されてるみたいでいやらしいよ。

そのままさっきみたいに、左右に大きく振ってごらん。

「ああん……やだ、これ……死にたい……」

いいねぇ。くい、くいって腰が揺れるたびに、お尻の穴がチラチラ見えそうになるよ。

「言わないでぇ……」

どうしようか。

いま撮ってるこのムービー、今度愛子が入る大学の関係者に、本当に見せちゃおうか。

一躍有名になって、構内を歩いてたらジロジロ見られるかもよ。

「やめてやめて、それだけはいやぁ」

せっかく撮ってるんだから、カメラに向かってこんなふうに言ってみようか。

あのね……。

「そ、そんなこと言えません。絶対無理！」

え、絶対無理？

「うう……それだけは……勘弁してぇ……」

じゃ、帰る？　僕ともバイバイになっちゃうけど。

「いやぁ……意地悪……それを言うところ、撮るんでしょう？」

うん、そうだよ。

「じゃあ、じゃあ……誰にも見せないんなら……言ってもいいです……」

さぁ、どうかな。愛子がいい子だったら、そうするかもね。

「誰にも見せないで、お願い！
いい子にするから。いっぱい気持ちよくしますから……」

気持ちよく？　ほう、たとえば？

「お、おしゃぶりとか……あと、寝ててもらって、私が上で一所懸命動いて……ああ……恥ずかしい……」

かわいいねぇ、愛子は。
分かった、考えとくよ。

◆

さ、そうやってショーツをずらして、半分晒したお尻を振りながら、
さっき教えたとおりに言ってごらん。

「は、はい。
わ、私は今度〇〇大学に入学する愛子です。
これを見てる〇大の皆さん、構内で私を見かけたら、いつでも空いてる教室に連れ込んでください。
お口とか、オ×××とか、お尻の穴とか、好きなところを使って、性欲処理の肉便所にしてくださいっ」

はい、よく言えたね。

じゃあ、もし本当に男子学生に声を掛けられたら、ちゃんと犯されるんだよ。分かった？

「うう……」

あれ、返事は？

「うう……わ、分かりました……」

それじゃあ愛子　、そろそろ全部見てあげようね。
ショーツを全部下ろして、お尻を丸見えにしなさい。

「うう……はい……」

どれどれ。近くで見てあげようか。
僕もベッドに上がろうかな。よいしょ。

ああ、丸見えだよ、愛子　。いやらしい亀裂がぱっくり割れて、生赤い中身が見えてる。

「うう……あああ……」

ほら、後ろに手を回して、自分でお尻を左右に広げて、もっと見せてごらん。

「こ……こうですか……？」

そうそう。凄いね。ぱっくり割れて、愛子の入り口が丸見えだよ。

おや？　なんか濡れてないか、ここ？

「あっ、やっ、触らないで」

ああ、ほら、こんなに濡らして。僕の指がねっとり糸引いてるよ。

いやらしいねぇ、愛子　。

僕にエッチな姿を見せつけながら、自分で感じちゃったんだね。
スケベなマゾ娘だね、愛子は。

「うう……違う……違います……」

じゃあ、このぐちょぐちゅに濡れたオ×××は何？　もう入れて欲しくてたまらないんだろ？

「いやぁ……そんなこと……」

それじゃ、このまま放っておいてもいい？
入れるもの触るのもなしで、ただじっと見てようか？

「ああん、意地悪ぅ……」

じゃあ、ちゃんと言いなさい。どうしてほしいの？

「入れて……ほしい……」

もっと、きちんと。「い、入れてくださいっ。お願いします」

いい子だ。じゃあ、入れてあげるね。もっとお尻突き出してごらん。

さぁ、ここからは先は大人の時間だよ。

制服女子〇生の記念撮影は、これで終了だね……。

（了）